

子供と向精神薬

2006年3月オランダ、若い人のアライの会議にて、
若い人のアライの国際照会者、ジェニー・サザマの話より

向精神薬について話したいと思います。子どもへの投薬は、ここ数年ですさまじい勢いで増えています。アメリカでは、特に、黒人の少年が標的になっています。彼らは、人種差別、若い人への抑圧、男性への抑圧に反抗したために責められ、薬を与えられています。

たいていは、学校での子どもの行動に問題があるから投薬するのだと説明されます。人手の足りない学級を運営していくために、学校は両親に、子どもたちへの投薬を勧めざるをえません。学級の人数は多すぎるし、先生は過労で、疲れ果てているのです。「問題解決」(子どもへの投薬)することは、うまくいっていない状況や、社会で起こり続けている出来事から目をそらさせます。多くの若い人が本当につらい毎日を送っていること、彼らは学校が提供しないものを必要としているという事実には目がふさがれます。

クラス担任を持つ二人の先生と話した時のことです。彼らは最後には、子どもが向精神薬を飲んでくれなければ、学級を運営できないことを認めました。私は、「それなら、そう言いましょ！子どもにとって薬が必要だとは言わないで。薬を飲んでくれないと、教師が困るのだと言いましょ。それなら、この状況をシステムの問題としてとらえ始めましょうし、子どもたちの問題にすることを止められます。」と言いました。

向精神薬は、だれのためにもなりません。再評価カウンセリングの指針では、すべてのコウカウンセラーに、向精神薬の使用に反対すること、薬を飲んでいる人を責めないこと、問題の原因として抑圧のシステムを見ること、そして向精神薬の使用や「精神病」の概念について、はっきりした立場にたつことを困難にする、あらゆる傷についてディスチャージすることを、強く求めています。

再評価カウンセリングのコミュニティでは、この指針についてまだ完全な合意を得ていません。この指針に同意していない人は、同意しているふりをすべきではありません。ディスチャージし、自分で考えることが必要なのです。人間に対しての絶望や、向精神薬についての混乱をディスチャージしなくてはなりません。ディスチャージなんか役に立たないという気持ちもディスチャージすることが必要です。私の考察によると、人はディスチャージを完全に理解してないから混乱するのです。多くのコウカウンセラーが、ディスチャージによってどんな問題も解決できることを、まだ信じきれずにいます。

製薬会社（そのうち大半が向精神薬を作っています）は、世界で最も儲けている企業に

あげられます。彼らが向精神薬を作るのは、利益を上げるためであって、人々を助けるためではありません。

人が「脳の器質的な障がい」について話しているとき、私はただそれを聞いて、情報を提供します。彼らが、「精神的な障がい」について話すとき、「人はただ泣くということが必要なんですよ」と言います。もし、彼らに子どもがいるときは、子育てがいかに大変な仕事か、子どもの暮らしがいかにつらいかについて話します。私は彼らの子どもを賞賛し、親としての彼らを賞賛します。彼らに子どものどんなところが大好きか聴きます。なぜなら、親は子どもの「悪い行動」にばかり目がいて、子ども自身を見ていないことがよくあるからです。私は聴くことに時間を費やします。それから、きっぱりと言います。「薬は役に立たない」と。人は、聞きなれた意見とは違う意見を必要としています。しかし、それは意外と難しいのです。なぜなら、親というのは簡単に自分が悪いと感じてしまうからです。私が完全に味方であることを彼らに知ってほしいと思います。多くの親たちは、私に同意してくれます。彼らは、ただ、ほかにどうしたら良いかわからないだけなのです。彼らは子どもを助けたくてたまらないのですが、あらゆる問題が、向精神薬によって「解決」できる「障がい」のように見えてしまうという大きな抑圧のもとにいるのです。

精神「障がい」というようなものはありません。実在しないのです。ADHD（注意欠陥多動障害）も存在しません。恐怖なのです。「障がい」は、傷を表現するために新しく作られた名前であり、その目的は、利益のために薬を売ることです。1980年から1995年にかけて、約200種類の新しい「障がい」が「名づけ」られました。処方薬の必要な「障がい」が増えれば増えるほど、利益のために薬が売られます。

ほかの方法があることを忘れてはいけません。ディスチャージです。私は、親のために、「向精神薬の代わりになるもの」というワークショップを開いてきました。このワークショップでは、コウカウンセリングの入門的な講演をして、ディスチャージについて話します。私たちはディスチャージがどんなにすばらしい「方法」であるか、忘れてはいけません。自分や子どもたちがどんなに知性的か忘れてはなりません。私たちは、このことで仲間を作ることができます。挑戦できます。まず、話し始めましょう。親のサポートグループ、あるいは一度きりの会議でもいいので、やってみましょう。子どもたちにとって、この問題について毅然とした態度をとる私たちを見る必要があるのです。このことについて子どもたちとセッションすることも必要です。

息子のクラスの、ある子どもは薬を与えられています。息子には、その薬がどんなものか、正確には伝えていません。彼がはっきりと聞いてくるまでは、説明しないつもりです。私が息子に伝えているのは、その友達がとても素晴らしい子どもだということ、感情豊か

な彼にとって学校の規則に従うのはつらいこと、でも、感情を持つのは素敵なことだということです。規則は学校をスムーズに運営するのに役立つけれど、学校にとって必要なのは、もっと多くの大人の存在と、大人がもっと話を聴くことなのだと言明しています。学校はその友達の感情面を手助けするようには作られておらず、彼の感情の方を変えようとしていることも伝えています。一番大切なのは、息子を含め多くの人が、この状況を変えるために取り組むことです。

考え続けること、そして発言することが重要です。どんなふうに話すかは、やり始めてみないとわかりません。間違いも犯すでしょう。それでも、あきらめないこと、自分の考えを信じ続けること、仲間を作っていくことを、私たちは学びましょう。子どもへの投薬について、「自由主義」であってほしくありません。なぜなら、それは自由ではないからです。若い人が問題ではないのです。

Children and Psychiatric Drugs

プレゼントタイム 2008 年 1 月号 12 - 13 ページより

Jenny Sazama

若い人のアライの国際照会者

翻訳 中尾悦子

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります(翻訳 2008 年。原文 2008 年)。

この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。